

三国との交易

(一) 川着き (下野田町)

いつ頃のことかは分かりませんが、覚円寺の前を流れていた錠田川を川船が行き来していたことが、昔の古い地図と加賀川家の先祖からの言い伝えで分かりました。

加賀川家の先祖は、石川県(加賀の国)から下野田へ移り住んだそうですが、昔、三〇の五八番地で油屋を営んでいました。

豊地区は、昭和三十年頃まで、自分の家で使う油は自分の家で生産していました。

春先になると、どの家も畑に菜種を蒔き、五月初旬は菜の花が真っ盛りで畑一面黄色いじゅうたんを敷いたようにきれいでした。その花の間を蝶が飛び交い、やがて実を結び、茎が枯れると刈



り取りが始まりました。

庭先にむしろを敷き、その上に刈り取った菜種を干し、よく乾くと棒でたたいて黒い小さい粒の菜種を取りました。

菜種は、油屋へ持っていくと搾った油と取り替えてくれました。そして菜種から搾り取った油だから菜種油と言いました。

豊地区は、昔から菜種油の生産地だったらしく加賀川さんのお店では沢山集まった油を船に積んで三国港まで運びました。そして帰り舟には、三国で仕入れた荷物を積み、下野田まで帰ってきて商いをしたので油屋は大そう繁昌し、裕福だったそうです。

しかし、錠田川は昭和五十九年に暗きよ排水路になり、川は埋められて道路になってしまったので、今のわたし達には想像もできない話です。

ところが、その話を聞いた後に福井県の糸里制の復元図を見て驚きました。錠田川を挟んで油屋

の反対側は川着きという字名になっていました。

「ほら、ここが昔、船の着いたとこやぞ。下野田も繁昌してたんにやのつ。」

と、県の埋蔵文化センター所長の青木豊昭先生に指摘されました。

昔の交易は、川が主流だったと言われていますが、川着きの場所が相当広いので、油だけでなくもつと他にも三国との交易があったものと考えられます。

(一) 川つどう

(下司、鳥井、当田町)

「荷が着いたぞう。」

「荷が着いたぞう。」

と、ふれ回る大きな声が聞こえると、鳥井村、当田村、熊田村の人達は、日野川の土手を下り、畑の中を走って吉野瀬川の木橋を渡り、田んぼのこやしになるほっかにしんを取りに、こつどうへ急

ぎました。

こうどうは、鳥井の船着き場の横の岸辺に造られた荷物の積み降ろしをする場所のことです。

わらで編んだ四角い袋のほっかにしんを受け取ると、人々は、

「よっこらしよ。」

と、肩にかついで家へ持って帰りました。

このにしんは、魚油（にしんの油）を取った後のかすにしんで、一寸五分（四、五センチ）ぐらいの長さに切り、田植えが済んだ後に、四株の苗の間に一本ずつ差し込んでこやしにしました。

このように、豊地区からは年貢米（昔、田畑にかけられた税）を三国港へ送り、三国からは、田んぼのこやしになるほっかにしんや魚のしめかす、灰俵などが運ばれました。

魚のしめかすは、七月頃、田んぼの追肥（後からやるこやし）として使われますが、それまでに天日によく乾かしてから、古い餅つきうすずつ

て粉にし、田んぼにまきました。

また、俵に入った灰は、稲が丈夫に育つように、これも追肥として田んぼにまかれました。

このように、昔は鉄道も、自動車もなかったので、三国港と鳥井村の間には船便があり、思い荷物や、大きな荷物は川船を使って運んでいました。

下野田村の差出明細帳（加藤家文書）に、

「後年貢米当御代官所同郡下司村川岸江附出、三

国湊川船二而 下ヶ申候」

とあるところから、下司村にも、船着き場や、こうどうがあり、近郷の村々から搬出される年貢米の集約地であったことが分かります。

注 ほっかにしん

北海道で沢山取れたにしんの油かすで、藁で編んだカマス（袋）に入れて送られてきた。

注 魚のしめかす

魚類の油をしぼったあとのかす

大正初期 橋梁と波田の地圖

